

書評

田中孝信・要田圭治・原田範行編著
『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』
(彩流社、2016)

永富 友海



本書は企画から出版まで3年を要したという労作の論集である。編著者の主たる関心は、一筋縄ではいかないセクシュアリティの「多様な現われ方や表現、表象」の分析にあり、その実践において、対象となる時空間を「ヴィクトリア朝に絞る」という経緯のあったことが原田範行の「あとがき」から読み取れる。変動著しい時代を構成する無数の様相を、セクシュアリティという多層かつ多義的な現象との関係性から読み解くとき、論文間の関連が希薄になる惧れは多分にあり、一冊の論集として成立させるという難題への対処に少なからぬ時間が費やされたのではないかと推察する。

その意味で、個々の論文の背景を形成する歴史的文脈を跡付け、本書の文学史的流れに生じた欠落を、文学テキストの単なる素描に留まらないレヴェルで補完してみせた田中孝信による「序章」の役割とその意義は大きい。どのくらい大きいかは、本書の目次を一瞥することで理解されるだろう。マルサスの人口論の影響、誘惑・売春取引抑制法案、ブロンテ姉妹の小説、女性活動家の社会浄化運動、少女売春を暴いた新聞記事、ワイルドとジャーナリズム、イースト・エンドにおける移民集団、ロレンスの『息子と恋人』。テーマは多岐にわたり、執筆者各人の個性も考えれば、論集としての統一性を執拗に求めるのは望蜀の願いであるという気がしてくる。

しかし「序章」を皮切りに本書を通読したとき、断片的に過ぎるのではないかという危惧は裏切られる。ヴィクトリア朝におけるセクシュアリティ認識の変遷を整理する「序章」では、本論で扱われる文学作品の偏頗ともみえかねない選択を埋め合わせるかのように、『嵐が丘』『白衣の女』『ドラキュラ』『渦』についての具体的な分析の視座が提示される。次

に、〈新しい女〉の対概念としての〈新しい男〉が登場する世紀末の現象を主要な先行研究の流れを辿りながら、ヴィクトリア朝の文学史にセクシュアリティという観点から切り込むことの妥当性を標示する正典性の高い作家——ディケンズ、トドロプ、ジョージ・エリオット、ステイーヴンソン、コンラッド、オリーヴ・シュライナー、グラント・アレン、セアラ・グラント、コナン・ドイル——への言及を散りばめる。かくして本書がカヴァーするヴィクトリア朝から（ポスト）ヴィクトリア朝までの見取り図が鮮やかに浮かび上がる。

「序章」以下、本体の論文は時系列に沿って配置されている。文化研究の色合いの濃いもの、文学テキストの分析を前面に押し出したもの、方法論はさまざまである。前者については、従来見落とされがちであった社会的文化的文脈に光を当てるといった積極的な姿勢が感じられる。例えば一章の要田圭治論文は、18世紀末の出版以降、ヴィクトリア朝社会に決定的な影響を与えたとされるマルサスの『人口論』の、その影響の実態を明らかにするために、マルサスの系譜に連なる3人の内科医たち——ジェイムズ・フィリップス・ケイ、ヘクター・ギャヴィン、トマス・サウスウッド・スミス——の統計学に依拠した「思考と活動を検討」し、マルサスとの分岐点を明るみに出す。二章の閑田朋子論文は、「社会悪」としての売春をめぐる議論が喧しかったヴィクトリア朝において、性の二重規範に立ち向かったジュディス・バトラー率いる1860年代以降のフェミニズム運動に耳目が集まりがちななか、それ以前の40年代に、「誘惑」行為と売春取引を抑制する目的で発案されたスプーナー法案が、幾度かの修正を経た結果、否決されるにいたる過程を丁寧に跡付ける。

三、四章は一転して文学テキストの分析へと移行する。シャーロット、エミリに比して低評価に甘んじているアンの、極めて「散文的な」『アグネス・グレイ』において、欲望を孕んだ肉体として立ち現れてこない、ガヴァネスとしての抑制されたヒロインの「身体」に亀裂が入り、欲望が垣間見える瞬間にこそ、当該テキストを面白く読む「秘訣」があると侘美真理は考える。こうした身体概念——社会的文化的コードに抵触しないように、欲望や性を内に封じ込めた器——と並行して、侘美はこの作品に別の身体レベルをも読み込もうとする。すなわち「ひとつの表象システム」とし

てのテキストが有する「身体性」であり、この発想は、一章でマルサスの後裔としてのケイが、「マンチェスター社会を一個の〈社会身体〉とみなしたという指摘とどこかで共鳴しあって、「身体」という批評概念の汎用性が認識される。

面白く読むための「秘訣」を見出しながら、その面白さを顕然たる事実として提示できないもどかしさが侘美の客観的な論調から透けて見えるのとは対照的に、『ジェイン・エア』のバーサと『サルガッソー』のアントワネットにメドゥーサのイメージを見ようとする本田蘭子の議論は、終始高揚した口調で語られる。ポストコロニアル批評の文脈で語られがちなバーサについて、「そうした主義や構造を背負った議論では、どうしても彼女の肉体に根ざした本質的な感情を拾い切れていないのではないか」と危む本田は、「一人の女性としてのバーサの感情に寄り添う」ことがバーサの真実に近づく道だと考え、その手掛かりとしてメドゥーサとバーサの悲劇を二重写しにする。シャーロット・ブロンテがバーサの造形にあたってメドゥーサを念頭においていたかどうかを確かめることが「本章の趣旨ではない」と言いつつも、両者をつなぐモチーフを小気味よいほどに次々と指摘し、ふたつの物語の同一構造を主張する本田の口調には聊かのためらいもない。であればこそ、例えばロチェスターを「貴族」と読み違えるといった強引さを押し通してまで導き出そうとする結論が、バーサにメドゥーサの原型を見出すことで、彼女の「痛みや切なさがより普遍的に立ち現れてくる」という一般論にしかなりえていないことは残念である。

続く五章で市川千恵子を取り上げる女性運動家エリス・ホプキンスは、二章の女性ジャーナリスト、イライザ・ミーティヤードの活動に連なり、性の二重規範に抵抗する。社会浄化運動の機運が高まる後期ヴィクトリア朝において、エリス・ホプキンスは売春問題に積極的に取り組む一方、文筆家としての能力も発揮する。彼女の思想と矛盾を読み解くために市川が着目するのは、医師であるジェームズ・ヒントンの伝記と、小説『ローズ・タークランド』である。ヒントンの利他主義に感銘を受けたホプキンスは、実は一夫多妻制を唱え、「ヴィクトリア朝中期のセクシュアリティの混沌そのものを体現」したようなヒントンの「反道徳的で破壊的な想像力」を切り捨て、彼を「聖人化」してしまう。ホプキンスの身振りは、1860年代に

活躍した女性センセーション・ノヴェリストを、男性の視点に成り代わって攻撃したイライザ・リン・リントンのような批評家と別種の捩じれを秘めているように思われ、興味深い。その捩じれは、『ジェイン・エア』を下敷きとした『ローズ・タークェンド』に一層はっきりと表れている。そこではバーサの監禁という秘密が、ローズ(≒ジェイン)の伯母アデル(≒リード夫人)の、身体に障害を持つ息子の幽閉へと置換され、医師キースから性的暴力を受けたローズが「恍惚感」を覚えるきわどい描写も交えながら、最終的に彼女に感化されたキースと結婚したローズは、妻、母という「社会的に承認」された役割を通して「自律性」を備えた女性となり、家庭を自らの「欲望を再生産する場所へと変える」。たしかにそれは「ユートピア的」な結末ながら、「欲望充足の新たな模索のためのシナリオが導く展開」であると市川は結論づける。『ジェイン・エア』のメタ批評と言うべきこの小説は、本家の『ジェイン・エア』への新たなフィードバックを可能にする意義深いテキストである。

性の二重規範是正の動き、社会的身体の秘めたる欲望といった座標軸に沿って本書を読み進めてきたとき、W・T・ステッドが『ペル・メル・ガゼット』に発表した少女売春のセンセーショナルな暴露記事「現代バビロンの乙女御供」を分析する川端康雄論文が、本書の大きな分岐点であるように思われる。売春の実態を暴くためにステッド本人が買春を装って少女にインタヴューし、過激な効果を狙って事の顛末に脚色を加え、ポルノグラフィ要素を加味した一連の記事において、本来主体であるはずの少女はステッドの煽情的な筆致の客体へと還元されてしまう。ここでは、ステッドの語り／騙りを促した売春の禁止や抑制という主旨とは逆方向に作用して、売春の言説をひたすら拡散させる大衆ジャーナリズムという装置の構造が浮き彫りになる。

ジャーナリズムへの関心は、原田範行のワイルド論にも引き継がれ、ワイルドの戦略を特定する鍵として機能している。『まじめが肝心』執筆時の1890年代には、アーネストという名前もしくは単語が同性愛をめぐる言説と分かちがたく結びついていたことを指摘したケリー・パウエルの研究を主軸に据えたこの章で、原田はあえてアーネストという危険な名前を使わずにはおれなかったワイルドが、その自己実現の欲望を果たすために

ジャーナリズムと取り結んでいた共犯関係に焦点を当てる。同性愛裁判を境に中心から奈落へと急転直下するワイルドの眼を覆わんばかりの主客転倒ぶりは、ジャーナリズムのいかがわしさを体現して余すところがない。

中流階級のお上品さを旨とするヴィクトリア朝において、中心／周縁が逆転する究極の現れを探り当てたのが八章の田中孝信論文である。イースト・エンドに形成された中国人移民の共同体という少数派集団と異人種間の混交という事態が、ジャーナリズムや小説を通じていかに表象され散布されていくかが考察される。イースト・エンドに群れ集う多種多様な国の人々が「人種・民族や宗教の相違がなくなる」までに混在しているさまを描き出すマーガレット・ハーネスの小説は、怪しいほどの異質性によって、従来のヴィクトリア朝のイメージや価値観に激しい揺さぶりをかける。論文の後半で議論されるトマス・バーク作『ライムハウスの夜』の出版が1916年であることを知って一瞬安堵したのは、それが提示する世界の価値転倒ぶりが衝撃的なまでに大きすぎたためである。

すでに紙幅が尽きたからというわけではないが、最終章の『息子と恋人』論については、精緻な読解に基づき、従来の説を読み替えていく武藤浩史の思考を辿ることは知的刺激に満ちた経験であると言うに留めたい。本書が(ポスト)ヴィクトリア朝作家としてのロレンスで本書を締めくくる意義をあえてあげるとすれば、『侵犯者』から『息子と恋人』への流れを論者が退化から再生と定義したことで、本書が抱える欠落——世紀末の退化の言説の具体的な分析とトマス・ハーディへの言及の欠如——を、図らずも明るみに出したということになるだろうか。性と生が高らかに鼓動し躍動する『息子と恋人』の世界には、たしかにヴィクトリア朝の性の抑圧という軛からの解放が窺える。もちろんそこに新たな軛がないわけではないのだが。

——上智大学教授